

1995年から2002年にかけての大阪大学における  
Methode Immediate の展開

ジャン＝リュック・アズラ

ジャン＝リュック・アズラ (2002) 'Le développement de la Méthode Immédiate à l'université d'Osaka de 1995 à 2002『言語文化共同研究プロジェクト 2001(外国語教授法としての“Méthode Immédiate”』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科)より。

日本では中等教育以後英語教育が行われるが、大学入学以前に英語以外の外国語(いわゆる第二外国語)に触れる機会は少ない。その英語教育にしても、講義形式による文法・語彙・和訳学習が中心で、コミュニケーションを中核に据えるものではない。全般的に見て日本人学生は英語で書かれたテキストの解釈には高い理解力を示すが、その一方で彼らは英語以外の外国語にほとんど接することがなく、また(英語を含めた)外国語でのオーラル・コミュニケーションの経験をほとんど持たないままに大学に進学する。

英語以外の外国語は大学において教育される。そこでは1年間ないし2年間にわたって、(英語以外の)どれか1つの言語を必修科目として選択するケースが多い。その選択肢としてはフランス語、ドイツ語、中国語、韓国語、ロシア語、スペイン語などがある。しかし、教師の数や教室の都合、あるいは履修コース上の要請などによって、学生が希望通りの外国語を選択できない場合もある。以下ではまず、大学における第二外国語の状況をごく大まかに振り返っておくことにしよう。

- 大学入学を果たした学生は、厳しい入学試験に合格してきている。これを目指して学生は高校時代のすべてを試験勉強に費やす。彼らは入試科目に関しては高い理解を得ているが、外国語によるコミュニケーション体験はほぼ得られていない。英語に関して言えば、彼らは文法とテキスト解釈(または和訳)を専ら学習する。オーラル面に関しては、外国語で自分自身について語ることさえ行っていないことが多い。
- また欧米と比べると、教室でなされる(母語による)コミュニケーション体験を日本人学生が豊富に得ているとは言い難い。英語であれ他の科目であれ、中等教育以降になされる小テスト、宿題、定期試験の多くは選択・穴埋め式の問題である。学生の一般常識や学力は総じて高いが、オーラルであれ筆記であれ、数語もしくは数行以上のまとまった分量の解答を作った経験が全くない学生もいる。
- 多くの場合、学生は大学における第二外国語の授業を「単位のため」に必要としか捉えていない(したがって彼らはこの学習の意義を理解していない)。彼らがある言語を選択するのは、偶然によるか、または単位が取りやすい、あるいは教師が感じがいいという評判を聞いたからにすぎない。
- 大学における第二外国語の授業では、一クラスあたりの受講者数が概して多い。クラスによっては20～30名程度の場合もあるが、大学によってはクラスあたり40名程度が標準とされているところもある。中には「会話」のクラスと名前がついていながら、50～70名もの受講生がいるクラスも珍しくない。
- その中で、人文科学系、医学・薬学系、法学系の学生を対象とする授業では、一クラスあたりの受講者数も少なめに設定されており、状況としては望ましい。これらの学生は学生どうし(あるいは教師と)のコミュニケーションに積極的に参加し、また語学学習そのものに対する高い興味や関心を示す人も多い。これに対して、工学系の学生を対象とするクラスでは、割り当てられた受講者数が多めである場合が普通である。これらの学生にとって、外国語でのコミュニケーションは、目下の(そして将来の)自らの関心事(専門)とは全く無縁のものとみなされる傾向がある。
- フランスの大学教育システムは、連続選抜方式 selection continue(いわゆる「誰でも入学できるが、卒業するのが難しい」方式)に立脚しているが、日本の大学システムは厳しい選抜試験を基本とし、入学後の学習についてはあまり厳しく管理されていない。最初の狭き門を通り抜ければ、後は事実上選抜は行われずに等しい。専門以外の科目について、学生は教室外で勉強することはほとんどなく、またそれを要求することもほとんど不可能である。各期末試験の直前に、まとめて復習するというのがごく普通のあり方である。

? 1995年に大阪大学においてMethode Immediate(イミディエイト・アプローチ)が産声を上げた当時の第二外国語をめぐる背景は以上である。なお、このMethode Immediateは、Louis Benoitがそれより前からすでに実践してきた授業活動を核として誕生した。

## 1. Methode Immediate の開発

小学校教師を勤め、ついで言語学を専攻した論者は、来日した際、外国語としてのフランス語教育(FLE)に関して専門的な知識を持っていたわけではなかった。加えて、学期の途中で引き継ぐこととなった担当クラスでは、前任者が使用していた教科書を引き続き使用するよう決められていた。このクラスの受講生たちは皆フランス語専攻生でなく、また人数が多く、しかも外国語に対して高いモチベーションがあるわけでもなかった。このようなクラスで会話の授業を行うことは初め不可能に思えた。教室の中で発言しようとする学生たち、古典的な(とはいえこうした大人数のクラスにはまるで不向きな)教科書に対する彼らの無関心、そして毎回添削しなくてはならない莫大な数の筆記練習問題などのために、論者は徐々に前途を見失っていった。Louis Benoitの次のような一言が一条の光となってくれたのは、ちょうどその頃のことだった。「学生に、彼ら自身について語らせたらいい。」この一言をきっかけに、状況は一変した。

最初は論者単独で、次いで Bruno Vannieuwenhuysse の助力を得ながら、Louis Benoit のオリジナルコンセプトを基点としつつ、後に Methode Immediate へと結実することになる様々なアイデアをそこから引き出ししていくには、4年の歳月が必要だった。そこでの作業は、学生たちが主体的に情報交換し合えるような会話をイメージし、それを実際に試してみることで、そしてシート形式で作成された教材を配布し、それらをあらゆるタイプのクラスで試してみることが課題であった。私たちは、様々なコンテキストでフランス語専攻生および非専攻生のクラス、10人以下のグループから上述したような大人数までの様々な規模のクラス、また全くの初学者クラスや2年目クラス、さらに上級クラスや街中の語学スクールにおいて、開発途上の会話シートを試験的に使用した。

私たちは、Louis Benoit のオリジナルアプローチとは全く別の地点にたどり着いた(Louis Benoit は、会話シートを使用するより、板書を活用する方が望ましいと考えている)が、彼から様々な恩恵を与えられていることには変わりない。彼のアイデアは私たちの仕事のいわば通奏低音として響き続けている。また、会話のコンテンツに関しても彼に多くを負っている。何より「出席シート」の発案およびその使用法を編み出したのは彼にほかならない。

### 3つの「枠組み変更」

着任当初、論者は古典的な教科書を使用していた。これは、架空の登場人物どうしによる会話を土台とする比較的コミュニカティブな教科書ではあった。また、この教科書には解説およびいくつかの「言行為 actes de paroles」、そして補足的な構文/文法の練習問題が付属していた。大部分の学生はこの教科書に興味を示しておらず、むしろつまらないと感じているようであった。Louis Benoit の最初の助言は、この教科書にある練習問題をとりあえず無視して、学生自身の日常生活に関する事柄(家族、余暇、勉強、好み、希望等)に着目して試みることであった。

論者は早速この戦略に則って、毎回の授業で筆記による小アンケート形式の課題を出してみた。これは、受講生の数およびコミュニケーションに対する彼らの明らかな「拒絶」の態度を目にするにつけ、オーラルでのコミュニケーションを課題としていきなり導入することは難しいと判断されたからである。紙の上で会話の諸要素を扱うことで擬似的に会話を行おうとするこの筆記課題は、ある程度までは奏効した。すなわち学生たちは回答を書き、自分自身について語り始めたのである。実は、コミュニケーションの土台はこの点にあったのである。とはいえ、この方法にもいくつか重大な欠陥があった。まず学生からの回答を添削するのに膨大な時間を要した(論者は350人の受講生を抱えていた)。加えて、学生たちを個別に「口頭で」直接添削できないことに強い不満感が残った。さらに、筆記によるこの「模擬会話」には、隔靴搔痒的とも言べきもどかしさを感じられた。添削する中で、いったい何を評価すればいいのかという問題もあった。スペルやシンタックスを直すだけでいいのだろうか?それとも、オーラルによるコミュニケーション「として」学生の回答を読み、その適切さを評価するのがいいのだろうか?

Louis Benoit の第2の寄与は彼の「会話テスト」を紹介してくれたことにある。これは、毎回の授業で学生一人ひとりと直接質疑応答するものであり、これにより学生の理解度の判定ならびに評価が同時に行え、かつ継続的な指導も可能となる。この方法はきわめて適切なものと思えた。というのも、授業の目的が「会話」にあるのだから、「いま・この場」でこの目的を実践し、「教室の中でリアルな会話」を行うことはまさに理にかなっている。また成績判定についても、期末試験のみを基準とするのではなく、むしろ学生の継続的な達成度を測る方がはるかに望ましいはずである。

他方、論者が行っていた授業は、「コミュニカティブ」とされる教科書を用いていたとはいえ、従来型の授業パターンを踏襲するものに他ならなかった。この従来型の授業パターンの特徴としては、次のようにまとめておくことができる。

- 文法理解と解釈に学習の中核をおいている。

- 筆記をベースとしている。
- 一連の講義形式で行われ、最後に期末試験が行われる。

これに対して、新たに提案された方法はこの3点のそれぞれに関して枠組み変更を促すものである。すなわち、

- 学習の中核に学生をおく。
- 会話をベースとする。
- 学習と評価の境界をなくす。

教師にとって、これは授業コンセプトにおける三重の枠組み変更ともなるものだが、これを実施する難しさについては過小評価されてしまう傾向があるようだ。実際、これらのコンセプトは、様々な教材において(また教師によって)、「ねらい」として掲げられているが、いずれの場合も実施されるには至っていない。相変わらず文法が中心とされており、オーラル・コミュニケーションの練習では、教壇から動こうとしない教師と席に座ったままの学生が、足早にほんの僅かなやり取りを交わすだけに終始している。そして成績判定については、結局期末の筆記試験だけで評価が行われている。この点、Methode Immediate の取組みは革新的である。そこでは、教室を見わたす視線が完全に再構築されているし、また言語的素材との全く新しい関係性、およびブライオリティに関する完全な再序列化が要請されている。

## 2. Benoit の方法と Azra-Vannieuwenhuysse の方法の主要な違い

このように Methode Immediate では、毎回の授業において、そこに参加している人間(つまり教師と受講生)の間でやり取りされる素材がその都度提供され、しかもその場でそのやり取りが実際に行われていく。

具体的には、まず会話のテーマが示され(例、「週末の活動について les activites du week-end」)、次いでそのテーマの周辺で想定される質問-答えのやり取りが導入される(「この週末、あなたは何をしましたか? Qu'est-ce que vous avez fait ce week-end?」; 「私は家にいました/友達と外出しました/両親のところへ帰りました、など Je suis [reste(e) chez moi / sorti(e) avec des amis / alle(e) chez mes parents] )。続いてこのやり取りを教師は実際に受講生と共にマンツーマンで(または最大2人の学生と共に)行っていく。この際教師は、毎回の授業でできるだけ多くの受講生(できれば全員)がこのやり取りを行えるように、また評価される機会を得られるように、可能な限り多くのやり取りを行っていく。このやり取りの評価は、毎回「出席シート fiche de presence」に記載される。なお、この出席シートは受講生が毎回の授業に持参し、自らの責任において管理する。

Methode Immediate はまた、個々の授業活動に対する時間配分を組立てる。毎回の授業は、およそ以下の2つのパートに分割される。

- 言語的素材のプレゼンテーション(「講義」のパート)
- 会話の実践と評価(「会話テスト」のパート)

しかしながら、Bruno Vannieuwenhuysse と論者は、Louis Benoit の教授法に対していくつか異論を持つようになった。以下ではそうした差異について取り上げて行くことにしよう。これにより、Methode Immediate では様々なアプローチが可能であることが逆照射されてくるだろう。

### 「インタビュー方式」のテストと「会話方式」のテスト

Louis Benoit は自らの担当する会話のクラスでインタビュー形式によるテストを行っている。彼は受講生に質問するが、受講生からの質問は要求しない。私たちとしては、むしろ会話のクラスでは「会話」を実践するのが妥当と基本的に考えている。つまり、双方向での情報交換こそが会話であると考えている。

インタビュー形式のテストには、短時間のうちに行えるというメリットがある。1分以内に、短い挨拶のやり取り(「こんにちは、元気ですか? Bonjour, comment ca va?」)にはじまり、次々と質問が繰り返されていく。これに受講生は躊躇することなく返答していかなくてはならない。この方法の主な目的は、前回の授業および/または今回の授業で学習したコミュニケーション内容を、各自がしっかりと自分のものになっているかど

うかを測ることにある。

「インタビュー方式」のテストでは、受講生はすばやく質問を理解することに集中しなくてはならない。質問を言い換えてもらうよう依頼するメタ・コミュニケーション的な言語的知識がない(もしくは少ない)ために、また自分が理解できなかった質問を教師に返すことでその場を何とか「切り抜ける」こともできない以上、受講生には質問を完全に理解するか、またはテストに(少なくとも部分的に)失敗するかのいずれかしか道は残されていない。また、そもそも Louis Benoit は、「知りません Je ne sais pas」「分かりません Je ne comprends pas」といった返答を有効な解答とは見なしていない。

また、このタイプのテストでは返答の迅速さや正当さ、それに文法的な正確さも測定される。これにより、きわめて厳密でかつ正確な評価グリッドが得られることになり、個々の学習者が獲得した言語的知識がそこで判定されることになる。こうした厳密さや正確さは、受講生にとって実にわかりやすく、教師が目的としているところが明確に理解できることにより、彼らは具体的に何を覚えればいかに明確に把握することができる。

また、このテスト時間の簡潔さは、とりわけ大人数のクラスで効果を発揮する。毎回の授業で受講生全員にインタビュー・テストが実施でき、より大きなクラスであっても最低2回の授業で1回は全員に行うことができる。

しかしながら、Bruno Vannieuwenhuysse と論者は、この「インタビュー方式」のテストにはそれなりの問題点もあると考える。まず、私たちの理解では、この中で獲得される会話(能力)とは、語のもっとも直接的な意味での会話(能力)とは言えないのではないか。それに、返答の迅速さとテストに要する時間の節約を維持するために、教師は常に緊張感と、またインタビューを行う者とインタビューされる者との間の力関係を持続させなくてはならない。こうした緊張感は、すばやく正確な返答をしなくてはならない受講生にしてみれば、せわしなく、かつ急かされていると感じられることだろう。逆に教師にとっては、同じ質問を何度も繰り返すわけだから、疲労感と共に消耗感が感じられるのではないだろうか。さらに、その内容面に着目するならば、確かにこのインタビュー方式のテストは多様な返答を可能にするものではあるが、しかし実際には「必要最低限度」のやり取りしか実現できず、したがって言葉によるコミュニケーションとして、これはきわめて特殊なケースを反映するだけのものではないだろうか。

一方、私たちが採用しているのは「会話方式」のテストであるが、これは教師と同様に学生にも質問してもらうことが期待されている。ここでなされる質問は個人的なことに及ぶこともあるのだが、私たちにとってこれは問題とはならない。

私たちのテストは離れた場所、すなわち教室の前あるいは後の隅で行われる。質問は矢継ぎ早に繰り返されるのではなく、また双方向でのやり取りがなされるので、返答を考えるための時間が与えられる。このプロセスを3分以内に縮めることは難しい。受講生数がさほど多くないクラスでは、このやり取りはより長くなる。したがって、このテストには、毎回の授業で受講生全員にテストを行うことができないというデメリットがある。このテストに要する時間は授業の核心となるものだが、それでも50人を超える大人数のクラスの場合、受講生は3回から4回の授業に対し1度の割合でテストを受けることになる。

こうした枠組みにおいて、私たちは数種類のテストを行っている。

- マンツーマン方式によるテスト。これは、学生にとってあまり馴染みのない方式だが、これに慣れてもらう意味でも個別に行われる。
- 「教師への質問」テスト。ここでは教師は質問しない(ただし「あなたはどうですか? Et vous?」という質問は可能)。対話の中でイニシアチブをとる練習をここで行う。
- 受講生どうしで会話するテスト。このペアに教師を交えた三者間での会話も導入する。

これらのテストの目的は、前回または今回学習した内容を実際の会話の流れの中で実践的に使っていくことにある。だがとりわけ重要なのは、外国語でのコミュニケーション体験を積んでいくことである。

結局のところ、私たちが要求しているのは情報を提供し、これを得ようとする、質問と返答、およびそれに対するリアクションを自然につなげていくこと、さらに対話相手を尊重する中で自らの発言をタイミングよく提示していくことである。私たちの関心は、返答の適切さに置かれているのであって、その迅速さや発音、あるいは文法上の正確さを重視するものではない(とはいえ、これらについて完全に等閑視するわけではない)。同様に、質問をすばやく理解することに關しても、私たちはさほど重要視していない。むしろ会話を続けていくこと、黙ったままでいないことに重きを置いている。つまり質問された際に何らかのリアクションを起こし、場合によっては質問を繰り返してもらったり、別の言い方

で言いなおしてもらったり、あるいは「フランス語で〇〇は何といいますか？ Comment dit-on ... en français ?」「〇〇とはどういう意味ですか？ Qu'est-ce que ca veut dire, ... ? 」といったメタ・コミュニケーション的な表現を使っていくことで会話を継続させていくことを重視している。

このテストは、会話を続けていく上で必要な様々な能力を習得していくのに適している。何より、外国語で話すことにつきまとうプレッシャーを軽減することに 貢献する。

またこうしたテストは、ティーチングアシスタントや、このような授業スタイルに関心のある(学外のフランス語教師、家族、友人などといった)フランス語話 者なら、たとえ教師経験がなくても容易に行えるというメリットがある。

しかし、この「会話方式」のテストは、先述した「インタビュー方式」のテストと比べると時間がかかるという問題点がある。その解決策としては、大人数を相手にする際には「インタビュー」を行い、その他の場合には「会話方式」を行うというものがあげられよう。このようにクラスの規模や特性にあわせて、「インタビュー」と「会話方式」を使い分ける(あるいはその両方を行う)といった様々な応用例が考えられる。

## 「クラス全体で行われるテスト」と「別個に行われるテスト」

テストを行う場所、あるいは教室のどこでテストを行うかという点においても、Louis Benoit と私たちとは方法が違っている。Louis Benoit が「クラス全体」でテストを行うのに対して、私たちは別個に行う。

「クラス全体」でテストを行う場合、教師は1人または2人の受講生に質問するために教室の中を移動する。教師が立ったままであるのに対して、質問された受講生は座ったままである。他の受講生たちは黙って、一切の活動を休止して教師と指名された受講生の間のやり取りに耳を澄ます。

この方式のメリットは決して少なくない。まず、テストを受ける学生が移動するのにかかる時間を節約できる。また、授業中の余計な私語がないことにはそれなりの利点があるに違いない。教師にとっては、クラスを確実に管理しているとの手応えがあるし、逆に受講生にとっては、クラスメートのフランス語をじっくりと聞くことで彼らのレベルが分かるだけでなく、自分の実力と比べることもできる。

しかし、この方式には同時にデメリットもある。1つだけをあげるならば、この方式によって導かれるコミュニケーションは、多かれ少なかれ他者の注目の下で なされている以上、かなり特殊なものであると言わざるを得ない。こうした注目、ないし他者の視線あるいはヒアリングは、場合によっては受講生にとっての深刻な障害となり得る。確かに教師は、質問に対してすばやく正確に答えるよう強く働きかけることで緊張感を生み出し、これによってそうした障害から受講生を解放してやるということも可能なかもしれない。しかし、そもそもそうした緊張感は必要なのだろうか。むしろよりシンプルに、受講生が他者の視線を気に しないで済むような場を設けることで、会話の障害となるものを取り除いてやる方が望ましいのではないだろうか。

私たちが採用しているやり方は、別個にテストを行うというものである。これは、まさに他者の視線というプレッシャーを軽減することを目的としている。テストを受ける受講生は教室の前方または後方の一隅に移動し、クラスメートに背中を向けて座る。一方、クラスメートはテストを受けている受講生の発言を聞くことはしない(ただし、当然のことながら、テストの行われる場所が最寄りの席からさほど離れていない場合には、発言を聞こうと思えば聞けないことはない)。このテストが行われている間、他の受講生たちは別の作業に取り組んでいる。多くの場合、授業中に配布されたプリントを基に次の課の予習をしたり、また自らが 受けるテストに備えて復習したりしている。

このテストにより、受講生は教師と直接的かつ個別な関わりを持つことができるようになる。グループから離れた場所で会話するわけだから、例えばクラス全員 の前では発言しにくい質問や返答であっても、この場では可能になる。実はこれに関してはこのテストの副次的なメリットが認められる。すなわち、こうした会 話が実現されることで、受講生は普段とは違った観点から自分自身をプレゼンテーションできるし、逆に教師は自らが担当する個々の受講生について多くの情報 を得ることができる。

他方、この方式のデメリットは、毎回の授業で30分から40分近くかけて行われるこの会話テストの間、テストを受けていない受講生が何をすればいいのかという点にある。私語・雑談が教室中に溢れ返ることもあり、教師にとっては心穏やかならぬ状況であるし、また少なからざる受講生にとってもこれは不快なもの であるだろう。また中には、何もしないでひたすらぼんやりとしている受講生もいる。そうであるからこそ、この方式には学習に対する受講生自身の自己責任の 意識が不可欠なのである。ペアを組んで復習しあう、予習する、ロールプレイする、練習問題を解くなど、受講生の主体的な取り組みが期待される場所である。

## 板書の活用とプリントの活用

Louis Benoit の方法と私たちの方法で異なるもう 1 つのポイントは、使用する教材にも表れている。Louis Benoit は板書活用を旨とし、配布資料等を準備することを初めから拒絶していた。彼の授業中、テスト以外の時間には次の 3 つの活動がなされている。

- 第 1 段階では、教師は今回のインタビューのテーマを示し、それに関連する質問をいくつか口頭で述べる。続いて、これらの質問に対して可能と思われる返答について、受講生と共に一覧表を作成する。なお、この間のやり取りは英語で行われる (Louis Benoit は日本語を話さない)。
- 教師はこれらの質問と返答をフランス語で板書する。ただし文章をばらばらに「解体した」形で書いていく。フレーズが丸ごと書かれることはほとんどなく、受講者はこれらの要素を基に自ら選択する返答を再構築する。
- この段階まで、受講生はノートをとらない。ヒアリングに集中し、理解に努める。授業の最後の数分間に、板書された要素をノートする時間が与えられる。受講生が復習するのは、このノートされた要素によってである。
- このやり方には、教師が適切な会話のテーマをその場で考案できるというとても大きなメリットがある。したがって、場合によっては受講生の反応を見て、適宜変更することも可能である。また最新の時事問題を取り上げることが可能であるし、新しい話題に関して常にオープンでいられるというメリットもある。大学で配布される学生生活に関する資料を取り上げるならば、前年度とは大きく異なる授業展開も期待できる。さらにスポーツや文化に関する話題も取り上げることができるに違いない。
- また、この方法によれば、受講生が授業活動により主体的に取り組むこともできると期待できる。教師から提示されるテーマに従って、受講生は自らの返答を提案することができるからである。

とはいえ、この方法には以下のような 3 つの問題点がある。

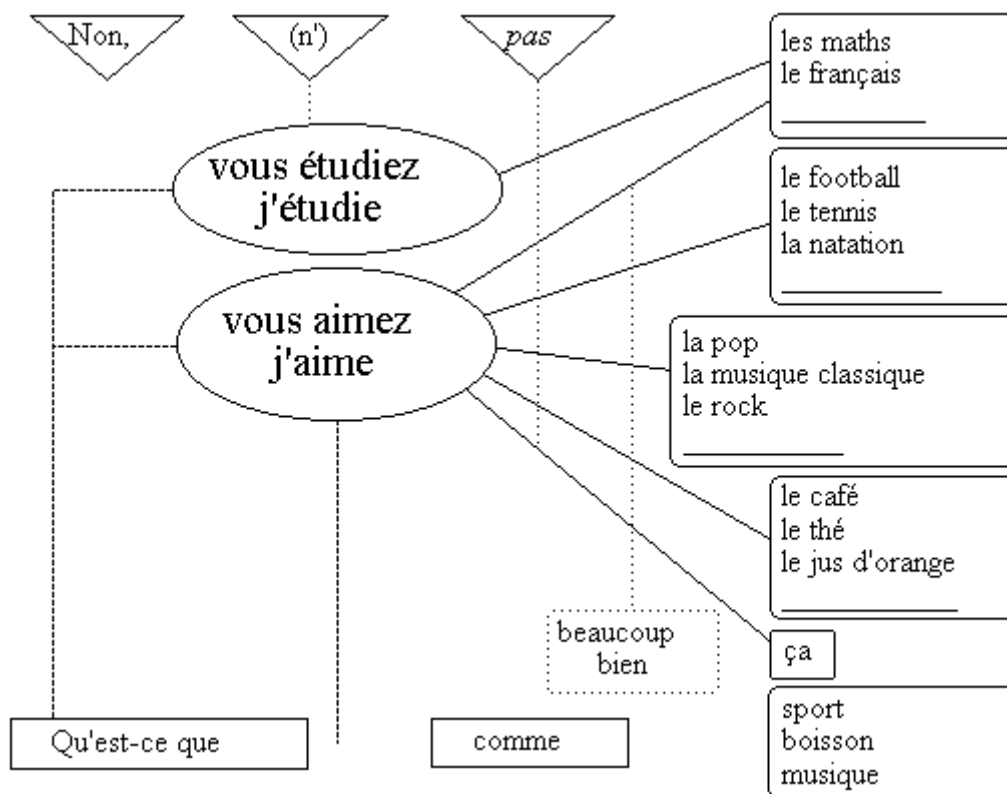
- 第 1 の問題点は、作業言語の問題である。返答内容に関して共同検討を行う際、どの言語を使えばいいのだろうか？ 英語がいいのか、それとも日本語がいいのだろうか？
- 第 2 の問題点は、返答内容について考えるための時間である。受講生と共に共通の返答を作り上げる場合には、かなりの時間が必要となるはずだが、できあがった返答は概して貧弱なものでしかない。実際には、返答を提案し完結させるのは、むしろ教師であったりする。
- 第 3 の問題点は、最後に得られる返答文が場合によってあまりにも多岐にわたっていたり、あるいは複雑なものになったりするという点である。実際、もたらされる言語的素材のベースとなる返答例がその場で作り出されていく限りにおいて、シンタックス構造が段階的に高度になっていくような例を考案することは不可能であり、またそれまでの授業で学習した文章構造を再利用していく機会を計画的に見出していくことも困難である。そのため、あまりにも多様な文章や構造を前に、せいぜいのところ受講生は単にその場限りの返答文を再構成し、丸暗記するだけに終わる結果となりかねない。これでは、外国語でコミュニケーションする際に私たちが了解しているような意味で文章を実質的に「構築」しているとは言えないのではないだろうか。

これら 3 つの問題点から、Methode Immediate の練り上げ段階の当初から、直接板書していくやり方は論者には不可能であると判断された。質問事項をあらかじめ構造化し、想定される返答を文書の形で受講生に提示していくことが必要であると思われた。

私たちの方法では、受講生は全員マニュアルもしくは「会話シート」のコピーを手に入れている。このシートには、以下のような 3 つの異なる形式で言語的素材が提示されている。

- 1 つもしくは 2 つの「マイクロ・ダイアログ」。今回のダイアログで使われる主要な構文がここでイラストの形で提供される (例:「この週末何をしましたか? Qu'est-ce que vous avez fait ce week-end? 」-「私は家にいました。あなたは? Je suis reste(e) chez moi. Et vous?」)
- 「構造ボックス」。これが Methode Immediate の私たちのバージョンの主要な改善点である。このボックスは、会話シートの中核となるものだが、これによりそれぞれのテーマに必要なすべての要素がシンプルに説明されている。テーマ毎に分類された用語や文法

構造(疑問を導く語、語順、動詞の活用、否定形など)、さらにダイアログの組み立て(扱われている情報内容は何か、それについて質問するにはどうすればいいか、またそれに答えるにはどうするか)が、ここに集約的に図式化されている。次に構造ボックスの見本を引用しておく。これは教科書“Conversation dans la classe”の会話シート [7a]からの抜粋である。



- 会話シートには完成させるべきダイアログ、または練習問題が盛り込まれている。

あらかじめ教材の著者によって準備されたシートを受講生に配布して用いるのであるから、この方法ではテーマを選択する自由は教師にはない。また、場合によっては学習内容がクラスに合致しないこともあるかもしれない。

しかし、これにはそうしたデメリットを補って余りあるメリットも少なからずある。

- 学習内容がすでに用意されているので、教師は毎回新しいテーマを探す手間が省ける。
- それぞれのレッスンに柔軟性をもたせるために、適宜板書による補足が行える。したがってこの会話シートは、毎回の授業で記入されていくいわば共通の土台とみなすこともできる。
- 受講生は予習を行える。また、自分1人で学習を進めることもできる。特に「会話テスト」の間に次の課を見ておくことができる。
- 「構造ボックス」によって文法的理解を深められる。ここでは文法に関する解説は特になされていないが、グlossaryや辞書を使うことによって、受講者は取り上げられている文章の意味を理解でき、また教師の手助けがなくても質問-答えのやり取りを構築することができる。

### 3. 展開、批評、展望

#### 「会話シート」および「構造ボックス」の誕生

Methode Immediate のシート化および教材としての練り上げプロセスにより、このアプローチは大阪大学フランス語科の枠を超えて様々な人に知られるところとなった。とはいえ、これらの会話シートは1日にして出来上がったわけではなく、また直ちに汎用に耐えるような様式になったわけでもない。

当初、会話シートには「構造ボックス」はなく、その代わりに質問とそれに対応する返答のリストがあるだけだった。それでも、それぞれのシートでは、可能な限り多くのコミュニケーション文が盛り込まれるように、シンプルな構成を目指して工夫が凝らされた。各課は、会話のテーマ毎ではなく、むしろ“avoir”や“prendre”のような様々な用いられ方をする動詞群を軸に編成された(例:“avoir”「私には兄弟が一人いる J'ai un frère」「私はパソコンをもっている J'ai un ordinateur」。“prendre”「私はコーヒーを飲んだ J'ai pris un café」「私はパンを食べた J'ai pris du pain」「私はシャワーを浴びた J'ai pris une douche」「私は列車に乗る Je prends le train」「それには1時間かかる ca prend une heure」)。しかし、このやり方は徐々に放棄されていった。

その後、論者は、より体系的な方法を模索する中で、想定される返答における範列事例を表化することを試みた(「私はスポーツをする/サッカーをする/ピアノを弾く/音楽をする/バイクにのる、など Je fais du sport / du foot / du piano / de la musique / de la moto...」)。これはワープロによる多様なグラフィック処理のおかげで可能となったわけだが、実はこれが「構造ボックス」の母体になった。

1998-1999年度、Bruno Vannieuwenhuysse の大阪大学着任を契機として、論者がそれまでに作成してきたシートを教科書としてまとめる構想が具現化する運びとなった。ほぼ1年間をかけて私たちは毎週様々なクラスや異なる教育環境下で会話シートを試し、改良を重ねた。そうした中、Bruno Vannieuwenhuysse は「マイクロ・ダイアログ」のアイデアをもたらし、これにより各課の主要構造が一目でわかるようになった。彼はまた、すべてのシートの学習項目を再検討し、新たな構造ボックスに結実させた。論者はそれをパソコン上でまとめた。

フランス語版の教科書が完成したのは1999年のことだが、いくつかのミス、それにいかにも素人の手作りといった側面があるにもかかわらず、この教科書にはすぐに大きな反響が寄せられた。数多くの称賛の声が私たちに寄せられたが、特にこの教科書を使用した教師たちからは、本稿の前半で述べられたような教室内での数々の問題点に対する1つの有効な解答が得られたとの謝辞が多数伝えられた。

## ドイツ語と日本語での展開

これと並行する形で、Bertlinde Voegelは、自らが担当するドイツ語クラスでMethode Immediateを実践し始めた。2年間にわたって、彼女はフランス語版の会話シートを応用し、ダイアログと構造ボックスを手書きで書きながら新しいシートを製作した。その後、私たちは共同で1年間かけて第1版のドイツ語版教科書を作成しようと試みたが、残念ながら脱稿には至らなかった。続く1年をかけて再度教科書化に取り組み、結局2002年1月にドイツ語版が完成した。すでにBertlinde Voegelが自らの仕事を通じて数年前から紹介してくれていたこともあって、この教科書は数多くのドイツ語教師によって使用されている。

また2000-2001年度にパリ第7大学で日本語の授業を担当していた池澤明子は、自らのクラスでMethode Immediateを実施した。私たちは共同でフランス語版に改良を加える形で日本語版の会話シートを作成したが、その成果として、2001年に58課、2巻からなるテキストが完成した(なお、それぞれの課には日仏の用語集がついている)。これらのシートに池澤がもたらした貢献は決定的なものであったが、彼女はさらにフランス語版シートの今後の方向性にも多大な示唆を与えてくれた。具体的には、いくつかの新しいテーマ、ダイアログのシンプルさ、3つのフォーマットのページレイアウト上の統一性、対話者の返答に対する「リアクション」の導入、より自然な会話のやり取りの要請、などである。

## フランス語での新たな展開

この2年間、Bruno Vannieuwenhuysse と論者はMethode Immediateのプレゼンテーションを精力的にこなしてきた。とりわけ関西フランス語研究会(「ランコントル」)や獨協大学フランス語教育研究会、そして様々な語学学校や会話スクールにおいてこれを行った。こうしたプレゼンテーションのおかげで、この教授法が広く知られ、また使用されることにつながってきたが、同時に私たち自身にとっても研究をさらに深めるいい契機となった。私たちが新たに考え直したことは、例えば以下の3点についてである。

- Methode Immediateの土台とはそもそも何なのか。他の教授法と根本的に違っているのはどのような点か。
- Methode Immediateに関して、教師をどのように養成していくか。そのアウトラインはどのようなものになるか。
- Methode Immediateで扱っていくことができる会話の異文化的な側面とはどのようなものか。

この最後のポイントについては、本稿に続くBruno Vannieuwenhuysseの考察を参照されたい。

他方、上記のうちの第一の問題に関して、私たちは今では明確にこれに答えることができる。Methode Immediateが他の教授法と区別される



のは次の諸点においてである。

- 体系化された会話テストの点において。これはどんなに大人数のクラスでも行うことができる。
- その場にいる人物どうし、すなわち受講生と教師によってその場で利用できる言語的素材の提供において。これを使って、受講生と教師は互いに個人に関する情報や状況について情報交換を行うことができる。
- メタ・コミュニケーションのシステムチックな活用において。

また2点目の教師の養成に関して述べれば、私たちは2つのイベントを企画・実施してきた(これらはいずれも大阪大学において行われた)。まず、2001年10月7、8日の両日にわたって「第1回 Methode Immediate 研究会」を開催した。37名が参加したこの2日間では、「Methode Immediate を体験する」、「学習素材とテスト」、「会話における異文化的学習」、「会話の授業における発音と文法」、「日本人教師とフランス人教師」、「Methode Immediate に関するインターネット・フォーラムの立ち上げ」をテーマとして、アトリエおよびターブル・ロンドが開かれた。そして2002年1月13日に「会話シートを考案するセミナー」を開催し、32名の出席者があった。ちなみにこれらの参加者は全員 Methode Immediate の実践者だったが、このセミナーにおいて各自が新しい会話シートを紙上で作成し、次いでパソコン上で完成させた。

この2つのイベントを通じて約20時間の研修活動が行われた。なお、「第2回 Methode Immediate 研究会」は2002年9月21、22日に大阪大学において開催される予定である。

## 様々な批判

Methode Immediate が広がりを見せるにつれて、私たちのもとには批判も寄せられた。それらはおおよそ次のような3つのタイプに大別される。

- 「Methode Immediate と同じ方法を、すでに自分たちは何年も前から行ってきている。」
- 「自分が担当するクラスでは、この方法を採用することは不可能である。」
- 「学習者にとって、これは良くない。」

第1の批判は主に、「コミュニケーション・アプローチ」と呼ばれる教授法を長年にわたって推進してきた教師たちから寄せられた。もとより私たちはこの教授法のメリットや効果について疑うつもりはない。また自分たちの方法やアイデアが時間的に先であったと主張するつもりもない。確かに私たちのアイデアはコミュニケーション・アプローチのいくつかの手法から着想を得ている。だが、結果から見ればMethode Immediate はコミュニケーション・アプローチとは別物である。実際、私たちがMethode Immediate を考案する契機ともなったクラスの状況(フランス語専攻でなく、モチベーションも低い大人数のクラス)においては、コミュニケーション・アプローチの方法では効果的に授業を管理していくことはできない。さらにコミュニケーション・アプローチの方法では、上述した3つのポイント(体系化された会話テスト、その場で使える会話的素材、メタ・コミュニケーションの活用)が十分満たされていない。逆にMethode Immediate のオリジナリティは、まさにこの3つのポイントにこそある。さらに、Vannieuwenhuysse、Voegel、池澤および論者の方法では、「会話シート」や特に(たとえそれが1970年代に開発された範列提示型教授法を幾分想起させるにせよ)「構造ボックス」において、受講生だけでなく教師にとっても等しく興味深く、また新しい独創的な方法で実践のための言語的素材が提示されている。

第2の批判からは、この論考の前半で述べられた状況、すなわちクラスの受講生が極端に多く、しかもモチベーションが低い場合のことが想起される。しかし、もともとMethode Immediate が開発されたのはそうした状況下においてであり、まさにそうした問題点を克服するために考案されてきたわけである。

こうした批判はまた、語学学校や会話スクールの教師からも寄せられた。彼らが担当する受講者にとって、「会話シート」とその導入は、クラスの雰囲気やニーズに合致しないというわけである。確かにこの批判は妥当なものだろう。そうしたクラスでMethode Immediate のみを実践していくとしたら、おそらくその授業は失敗する。しかし、私たちが実際に試みた経験に即して言えば、そうした場で、たとえばオーラルでの会話体験がほとんどない受講者に話し始めるよう促す材料としてMethode Immediate を用い、さらに他の教材を用いて様々な練習に発展させていくことは少なくとも可能である。

最後の批判は、どちらかといえばマージナルなものであったが、その主旨としては、オーラル・コミュニケーションに慣れていない日本人学生に対して、彼らが 苦手とする対面式の会話を強要することで彼らを苦しめている、というものである。この批判は、私たちが担当してきた学生を見る限り、ごく低いパーセンテージ(1000人に1人か2人)にしか該当しないものだが、それでも私たちはそうした学生のための解決策をそれぞれ講じてきた。それ以外の場合には、外国語でのコミュニケーション(これには当然のことながら、日本の学生にとって幾分かは異質な要素が含まれている)を実践する能力を育成するという使命を、私たちは効果的に果たしてきたと自負している。

## 展望

Methode Immediate には今後どのような展望が開けているのだろうか。以下に3つのプランをまとめておくことにしたい。

- 私たちは、初版を使用した教師たちからのフィードバックをもとに、教科書内容を改訂していきたいと考えている。特に「構造ボックス」に関しては、より精密でかつ見やすいものに改良する。また、ダイアログをより自然なものにし、かつそこに異文化に関する要素を盛り込んでいく。
- フランス語版とドイツ語版においては、文法事項の扱いをさらに拡充していきたい。日本語版にはすでに各課にまとめられた語彙リストの中に「文法メモ」があるので、これをモデルとしたい。
- 様々な研究会やセミナーを立ち上げて、今後も引き続き教師の養成を行っていきたい。加えて、現行のニューズレター、フォーラム、研究とリソースのためのWEBサイトを発展させ、Methode Immediateを実践する教師たちのコミュニティをより活性化させていきたい。
- 最後に、これは私たちの理想であるのだが、Methode Immediateが教科書という範疇を離れて、交換システムに基づく一種の自己増殖的なシステムになっていってくれればと願っている。これは、Methode Immediateに関心のある教師たちがそれぞれに「会話シート」を作成し、かつそれを交換しあっていくことで、多様なクラス規模や受講者に対応する常に新しい「会話シート」を互いが入手できるというシステムである。

このようにして私たちは、個々の教室環境・教師・段階および受講生の一人ひとりにとって、Methode Immediateがより細やかに適応していくことを願っている。

*Fevrier 2002*